

おと き た のぶ ひろ  
音 喜 多 信 博

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第101号
学位授与年月日	平成13年2月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 哲学専攻
学位論文題目	現象学的人間学と精神病理学・精神分析学
論文審査委員	(主査) 教授 野家啓一 教授 川本隆史 教授 座小田豊 教授 清水哲郎 教授 篠憲二

## 論文内容の要旨

### (1) 本論文の目的

本論文の目的は、今日の精神医学研究や生物学的研究の発展状況と照らしあわせながら、現象学的人間学の科学的意義を再評価することである。

「現象学的人間学」ということで私が念頭においているのは、おもにM.シェーラー(1874-1928)、L.ビンズヴァンガー(1881-1966)、M.メルロ＝ポンティ(1908-1961)といった著者の研究動向である。「現象学的人間学」という言葉は、1947年に出版されたビンズヴァンガーの講演集<sup>(1)</sup>の副題に基づくものである。ビンズヴァンガーは、E.フッサールの現象学やM.ハイデガーの現存在分析論を精神医学の領域に適用し、現象学的精神病理学(「現存在分析」)の分野を創始した精神医学者である。しかし、研究動向としての「現象学的人間学」の成立は、1928年に出版されたシェーラーの『宇宙における人間の地位』にまで遡ることができる(シェーラー自身は、みずからの試みに「哲学的人間学」という名称をあたえている)。シェーラーは、フッサール現象学から出発し、生物学の自然主義に反対して、人間精神の生み出す「価値」の領域に定位して思索をすすめた。また、メルロ＝ポンティは、とくにその『知覚の現象学』において、後期フッサールによる身体性の分析や生活世界論に依拠しながら、独自の身体論を打ち立てた。こういった意味において、この三人の思想のなかには、一貫した現象学的志向を見出す

<sup>(1)</sup> Binswanger, L., *Ausgewählte Vorträge und Aufsätze*, Bd.I, *Zur phänomenologischen Anthropologie*, Francke, 1947. 荻野恒一・宮本忠雄・木村敏訳『現象学的人間学』みすず書房、1967年。

ことができる。さらに、この三人は、フッサールのように純粹に形相的な現象学を実践したというよりも、さまざまな実証的研究、とくにゲシュタルト心理学や比較行動学の成果を現象学的な観点から総合することによって、みずからの思想を展開した人たちである。したがって、彼らの試みを、純粹現象学から区別して「現象学的人間学」と呼ぶことが適切であると思われる。

さきに、現象学的人間学の今日的な科学論的意義を明らかにすることが本論文の目的であると述べた。しかし、この限られた紙数のなかでは、心理学一般、生物学一般についての現象学的批判を扱うことはできない。私は、研究対象を限定して、現象学的人間学と精神病理学・精神分析学との関係について考察することをおして、この目的に迫ることにした。私は本論文の各章において、上にあげたような現象学者たちが、彼らと同時代の精神医学思想や精神分析学思想にたいしてどのような批判をしているかということを跡づける作業をした。さらに必要に応じて、こうした現象学的批判が今日の最先端の生物学的研究を先取りするような現代的意義をもつものであったということを随所で示した。

## (2) 本論文の構成

本論文は、独立した七つの章からなっているが、その内容上、大きく二部に分かれる。

第一部「メルロ＝ポンティと精神分析学」では、私は、現象学の「志向的分析」の方法と精神分析学の方法との相異点および両者の相補性を、メルロ＝ポンティの議論にそって考察した。第二部「現象学的人間学の科学論的意義」では、ビンスヴァンガー、シェーラー、ゴルトシュタインといった思想家の研究を中心に、精神病理学における現象学的・人間学的アプローチの意義を、科学論的な文脈で評価した。

## (3) 第一部の概要

以下、各章の概要を記す。

第一章「メルロ＝ポンティにおける志向的分析の問題」では、次のようなことが明らかになった。前期の著作『知覚の現象学』においてすでに、メルロ＝ポンティはフッサールのプログラムには収まりきらないような事象を目指してはいたが、しかし、そのことが志向的分析という方法そのものに対する批判にまではつながっていかなかった。後期の「存在論」は、(表象的意識のレベルにとどまる限りでの) 志向的分析の限界を自覚したメルロ＝ポンティが、その方法的前提に対して批判の目を向け、さらに、自分独自の方法的基盤を求めて模索を続けている過程として捉えることができる。そのときに重要な影響を与えたのは、精神分析学との対話なのであった。

具体的に言えば、たとえば次のようになる。志向的分析という方法は、想起は知覚の志向的変様態であり、過去意識は今一意識の変様態であるといったような「原様態－変様態」の区別を前提としている。さらに、志向的分析においては「原様態の優位性」が前提とされており、分析は変様態から原様態へと遡行するというかたちで進められる。私の見解では、このような方法の背後には、時間の線的表象の可能性が、それと意識されることなく前提とされている。その結果、たとえば想起体験の内容の超越性、すなわち現在に還元されないような「過去の過去性」が忠実に記述されないという事態が生じたのである。

これに対して、メルロ＝ポンティは、精神分析学において問題とされる「事後性(Nachträglichkeit)」

の概念や無意識の「無時間性」という性格のなかに、現象学的な時間意識の分析を越えるような事象を見出している。ここでは一例のみをとりあげたが、このようにメルロ＝ポンティは、精神分析学の成果を参照することによって、現象学の志向的分析の方法を再検討しているのである。

つづく第二章「現象学的潜在意識と精神分析学的無意識」においては、フッサールとフロイトが、それぞれ自分の学問の方法を「考古学」と特徴づけていたことに注目して、両方法の比較をおこなった。まず、第一に、メルロ＝ポンティの前期（実存主義的時期）の著作における精神分析学の扱いについて考察した。そこでは、メルロ＝ポンティは、精神分析学の自然主義的解釈を否定しており、精神分析学をフッサールの志向的分析の方法に基づいた実存的分析の中に解消しようとしている。つまり、精神分析学の「無意識」を、現象学の「潜在的（地平的）意識」のなかに解消しようという試みがなされているのである。たしかに、現象学も精神分析学も、顕在的・表象的な意識の構成物から遡って、前定立的・非主題的な身体的意味へと分析をすすめていく。こういった意味において、両方法は「考古学」と呼ばれるにふさわしいものである。

しかし、このような現象学と精神分析学との相同性によって、両者の差異が解消されてしまうというわけではない。前期のメルロ＝ポンティが試みたように、精神分析学でいう無意識を現象学でいう潜在的（地平的）意識のなかに解消してしまうことはできないのである。両方法を区別するのは、精神分析学における「抑圧」の仮説である。抑圧の存在ゆえに、無意識の分析のためには精神分析学独自の解釈の技法が必要となる。フッサールは『受動的総合の分析』において、フロイトの無意識に限りなく近づいてはいるものの、やはり現象学と精神分析学は完全には収斂しないのである。

このように、両方法の差異は厳然として残るものの、両方法が探求する事象の面においては、両方法が相補的に協働する可能性は閉ざされてはいない。とくに、メルロ＝ポンティの身体論や間主観性理論において、その好例を見ることができる。つづく第三章「メルロ＝ポンティ身体論と精神分析学」においては、とくに現象学的な情動研究や間身体性の研究において、精神分析学の成果を参照することが有益であることが示される。私は、メルロ＝ポンティが、1951年度のソルボンヌ講義「幼児の対人関係」や晩年のコレージュ・ドゥ・フランス講義「自然の概念」において、どのように精神分析学や発達心理学の成果をとりいれて自らの理論を形成しているかということを考察した。

従来、現象学においては、意識の分析のモデルは視覚に代表される知覚であり、フッサールにおいては、情動の研究は十分にはなされなかった。しかし、情動は、知覚に劣らず世界内存在の根本的様態であり、情動と身体性との関連を解明することは重要な意義をもつ。メルロ＝ポンティは、従来、知覚－運動系との関連でしか考えられてこなかった身体性の問題を、幼児の情動的発達との関連において考察している。そのときに参照されているのは、おもに発達心理学者H.ワロンによる、幼児の鏡像体験の研究である。メルロ＝ポンティは、さらに精神分析学者J.ラカンや精神医学者P.シルダーの議論をも検討することによって、情動という観点から独自の「間身体性」理論を作りあげている。

さらに、メルロ＝ポンティは、古典的心理学において前提とされているような「知性」と「感情」の二分法を見直すことを提唱している。われわれは、知性と感情を対立したものととらえ、感情は知性の妨げとなるものと考えがちである。しかし、メルロ＝ポンティの間身体性

理論の観点からするならば、通常の「知性－感情」の対立より一段深いレベルにあって、認知的発達を促していく基盤とでも呼べるような、情動的関係の層が存在することがわかる。このような層の存在を、神経生理学的な観点から検証可能な仮説として提示することの可能性を、われわれはA.ダマシオの研究のなかに見出すことができる。ダマシオは、進化生物学の立場から、人間の情動や感情が認知プロセスに与える影響について考察している。それによれば、人間の理性、とくに個人的・社会的問題にかかわる推論や意志決定は、ある状況やあるイメージが有機体に特有の感情（快・不快など）を引き起こすことが基盤となっはじめて可能となる。たとえば、自分に不利益になるような想定にたいしては、不快な直観が現れ、知的な費用便益分析のようなものをおこなう必要もなしに、不利益な選択を排除してくれる。ダマシオは、このような働きをする感情を「ソマティック・マーカー」と呼んでいる。

ダマシオの構想は、いまだ仮説的なものであるが、ここには「身体性」をキー・ワードにして、知性と感情の二元論を乗り越えようというメルロ＝ポンティの構想と収斂するものが見出される。私は、ダマシオのような実証的研究の成果によって、現象学的な研究の正当性が明らかにされるのではないかと考えている。

#### (4) 第二部の概要

第一章「ピンスヴァンガー再考——精神病理学的現象学について」では、ピンスヴァンガーの「精神病理学的現象学」の試みをとりあげた。この章では、まずは、現象学の「本質直観」「志向性」といった方法的概念が、精神病理学における記述の方法のなかにどのようにとりいれられているのかということ考察した。

さらに、志向的分析の方法に満足しなかったピンスヴァンガーは、ハイデガーの「世界内存在」という概念に影響を受け、「現存在分析」という方法を打ち立てることになる。ピンスヴァンガーは、現存在分析的意味での「世界（Welt）」と生物学的意味での「環境世界（Umwelt）」とを比較している。つまり、動物の環境世界においては、動物はその「構成計画」すなわち知覚や行動の有機的体制によって、まったく特定の刺激および反応可能性へと規定されている。それに対して、人間は自然によって与えられた有機的条件を越えて、その存在投企によって己れの可能性を開き、さらには文化的な事象へと開かれている。こういった意味において、人間の「世界」と動物の「環境世界」とは区別されるのである。

しかし、このような根本的な違いがあるものの、「世界」と「環境世界」という両概念は、主観－客観の分裂図式を乗り越えようという点において共通した志向をもった概念である。ピンスヴァンガーは、同じような志向をもった同時代の生物学的研究として、J.v.ユクスキュル、W.v.ヴァイツゼッカー、K.ゴルツシュタインといった人たちの成果をあげている。ピンスヴァンガーは、現存在分析を当時の生物学一般の思想潮流のなかに位置づけようとしているのである。このような意味において、ピンスヴァンガーの精神病理学的現象学は、たんなる主観的心理状態の記述にとどまる記述心理学や了解心理学とは異なった、積極的な科学論的意味をもつのである。

次に私が注目したのが、「内的生活史」という概念である。ピンスヴァンガーは、通常の意味での「心因」と「身体因」との区別の正当性を疑問に付している。この区別は、「精神/（物質としての）身体」というデカルト的二元論に基づいた区別であるが、ピンスヴァンガーによれば、真の対立は、「生命機能」に焦点をあわせた考察方法と、「人格の内的または精神的生

史」「内的生活史」)に焦点をあわせた考察方法とのあいだにある。

ここで「内的生活史」と言われているものは、外的な出来事の羅列ではなく、そういった外的出来事が主体的に意味づけされ、生きられたものとしての歴史である。生活史を重視するという点においては、フロイトの精神分析学の方法と共通のものがある。しかし、フロイトにおいては、小児期からの（とくに性をめぐる）出来事や外傷体験などの継起（「自然史」）と「内的生活史」とが混同される傾向がある。

「自然史」と「内的生活史」との区別は、重要な今日的意味をもつ。たとえば、近年、「アダルト・チルドレン」のブームなどにもなあって、「心的外傷（トラウマ）」という概念が過度に一般化されて流布している傾向がある。しかし、心理療法をとおして回想された「外傷的体験」を事実的経験と同一視することについては慎重にならなければなるまい。なぜなら、それが事後的に再構成されたものである以上、想起内容の真偽は確証しがたいからである。今日の認知心理学的研究においては、想起は共同的性格のものと考えられており、想起がおこなわれる状況によって想起内容にどのような変化が生じるかを調べる研究が盛んになっている。ピンスヴァンガーの「内的生活史」の概念は、このような現在の心理学的な研究動向にたいして、認識論的基盤を提供しうるものと思われる。

次に、第二章「メルロ＝ポンティにおける実存的分析」では、主体の「統合」という概念を導入して、心身二元論的発想を乗り越えようとしたメルロ＝ポンティの試みを振り返る。メルロ＝ポンティは、ピンスヴァンガーと同じような研究関心から、みずからの研究方法を「実存的分析」と呼んでいる。メルロ＝ポンティは、幻影肢患者や疾病失認患者についての病理学的データや、A.ゲルプとゴルトシュタインによって研究されたシュナイダーの症例について子細な検討を加え、これらの症例が、経験論によっても主知主義によっても、完全には説明されえないということを明らかにしていく。その結果、生理学的説明と心理学的解釈との対立よりも深いところにあって、両者を包括するような「実存的層」の存在が明るみにだされる。「生理学的なもの」と「心理学的なもの」とは、「世界内存在」の「全体的な存在の仕方」から抽象された二つの存在様態と考えるべきなのである。

こういった点においては、メルロ＝ポンティの構想はピンスヴァンガーのそれと大変に近いところにある。しかし、メルロ＝ポンティはそれにとどまらず、身体と精神とを連続したものとみなし、両者のあいだに一種の階層構造を仮定する。身体的機能は、われわれの高度の精神的活動がおこなわれている場合には、人格全体のもとに「統合」されている。つまり、身体的機能は実存全体のなかの部分として組みこまれ、その自律性を奪われている。しかし、身体的なものはわれわれの人格的実存の下にあって、つねにわれわれの精神的活動の基盤となっている。そのことが明らかになるのは、病気や疲労の際に、われわれの実存が「解体」してしまい、身体的機能が自律性を主張しはじめ、それによって意識の全幅が占められてしまうといった場合である。人格的実存による有機的身体の「統合」は完全なものではなく、つねにいくぶんかの「解体」の危険にさらされているのである。

ところで、メルロ＝ポンティの「統合」概念は、古典的反射理論におけるそれとは大きく異なっている。古典的な反射理論においては、個々の末梢部での反射は脳によって統制されていて、脳は末梢の自動運動を「統御」し「制止」するはたらきをずっと考えられていた。このような考え方にしたがえば、脳を損傷した患者においては、高次機能の基底にあると想定されている自動運動が解放されて、単純化した動物的機能の昂進が見られるということになる

であろう。しかし、事態はこのようにはならず、患者は、たとえば性的機能といった通常「下位の」機能と考えられているものについても障害を被っている。つまり、大脳はたんに下位の機能を「制止」するのではなく、下位の機能へも介入して、そのあり方を人間的に変容させてしまうのである。

とすれば、さまざまな精神病理学的行動も、それぞれが環境への適応のための代償的行動であると考えらるべきであって、たんなる特定機能の欠損態としては規定されえない。病的行動も、世界内存在の一様態、生体全体による環境への適応の努力と考えるべきである。現象学的・人間学的な了解の方法は、このような意味で、病者の行動の理解、そして、健常者における行動の「構造化」のあり方の理解に貢献できるのである。

このように、現象学的人間学は、古典的心理学の要素主義的発想に反対し、現代の生物学の成果に基づいた全体論的観点を導入する。このような基本的姿勢は、現象学派による精神分析学批判のなかにも反映されている。第三章「現象学派によるフロイト批判をめぐって」において、私は、シェーラーとゴルトシュタインによってなされた、精神分析学の「欲動」概念に対する批判の科学論的意義を評価した。そのうえで、現代の生物学的乳幼児研究の成果をとりいれた精神分析学者R.N.エムディの議論を参照することによって、現象学派による精神分析学批判が重要な今日的意味をもつことを明らかにした。

フロイトは全生物界を貫く「欲動」を想定し、人間においてはこの欲動が「抑圧」され「昇華」されることによって、いわゆる「精神的」なものと言われる学問、芸術、宗教などの文化的形成物がはじめて生み出されると考えた。これに対して、シェーラーは次のように言う。フロイトが人間のなかの生命的欲動の存在を仮定したことは正しい。しかし、フロイトの理論では、何が欲動を抑圧するのか、何をめざして、どのような究極価値に基づいて昇華が行われるのか、ということが説明されない。フロイトの理論は、その理論が説明せねばならぬもの、つまり「精神に固有の自立的法則性」をすでに前提としてしまっている。精神領域の自立的法則性があるからこそ、そこへと向かって欲動も昇華されるのである。

シェーラーは、このようにフロイトの欲動理論を批判しつつも、その基本的見解は受け継いでおり、「精神」と「生命」とを対立したものとしてとらえ、精神は生命的欲動を制止する働きをすると考えた。これに対して、脳病理学者のゴルトシュタインは、シェーラーは「生命」を純粋に「盲目的」「動物的」な欲動として考えたために、「精神」と「生命」との新たな二元論に陥ってしまっている、と述べて批判している。このような二元論的発想を、「有機体の全体性理論」という生物学的立場から乗り越えようというのがゴルトシュタインの構想である（『生体の機能』『人間』など）。

ゴルトシュタインによれば、人間においては純粋に「動物的な」欲動など見いだすことはできない。高度に統合された人間においては、欲動はすでに知性や文化といった人間的要素で変容を被っている。欲動が純粋な形態で出現しているように見えるのは、病理的な事例において、人間の有機的全体の統合が解体してしまっている特殊な場合にすぎない。したがって、フロイトがそうしたように、神経症患者をモデルにして構想された心的機構を、安易に健常者一般に当てはめることはできないのである。

フロイト理論の不十分さは、彼が「欲動」を当時の生理学をモデルにして、機械論的・要素主義的に構想したことに起因している。メタ・サイコロジーのなかの経済論的モデルにおいては、フロイトは快の発生を緊張の解除というところのみに求めている。つまり、性交時におけ

る快がそうであるように、神経システムに蓄えられた緊張の低減が快をもたらすというのである。しかし、緊張そのものもたらす快というものは存在しないのであろうか。われわれの直接的経験を反省してみれば、知的・美的創造過程やスポーツにおいてさまざまな快を感じていることがわかるが、そのような快はフロイト理論のなかでは積極的位置づけを与えられることはない。

要するに、フロイトにおける「快」はすべて内的エネルギーの放出にともなう快である。「快」についてのこのような考えは、生物も含めた自然界はすべてエネルギーの平衡状態へと向かう傾向性をもつというフロイトの自然観、生命観に裏打ちされている。フロイトの欲動理論はいわば「エントロピー・モデル」とでも呼ぶべきものであって、晩年の「死の欲動」という概念も、このような自然観にしたがって構想されたものである。

これに対して、生体システムの制御や複雑性を主題とする現代の生物学の成果をとりいれたエムディの研究によれば、人間の行動の動機は、フロイトが考えたような内的緊張の放出にともなう快だけでなく、複雑化や刺激の追求とも関連している。むしろ、人間の行動の動機の大半は、複雑さを増すことにともなう快、ないし興奮にあるという。エムディはこれを「ネグエントロピー的快」と呼んでいる。

エムディの仮説が正しいとするならば、精神分析学の人間観は修正を必要とする。人間は、内的緊張の解除による快のみを求め続ける惰性的存在であるどころか、世界の探索にともなう新たな刺激をうけとりながら、それを同化していくことに喜びを見出す活動的な存在なのである。このような考え方をとれば、学問的活動やスポーツなどにともなう快を、性欲動の抑圧や昇華によって説明する必要などなくなる。このように、今日の生物学の成果と照らし合わせることによって、現象学派による精神分析学批判の先見性が明らかになるのである。

第四章「精神医学と医療哲学・医療倫理学」では、これまでの議論を前提としたうえで、今日の日本において精神医療をめぐるなされている科学論的議論や倫理学的議論を概観し、精神医学における現象学的・人間学的アプローチの課題を提示した。

今日、精神医学の領域では、生物学的アプローチが隆盛をきわめており、病める患者を全体的・心身統合的に理解していこうという現象学的・人間学的アプローチはかえりみられなくなりつつある。精神医学においても、他の医学領域と同様の実証性が求められた結果、生理学還元主義や遺伝学還元主義とでも呼べるような事態が蔓延しつつある。私は、この章の前半部において、このような科学主義的発想から生じる先入見が科学哲学的にみて問題があるということを、精神医学における「病因」と「診断」というテーマに即して論証した。そして、どんなに生物学的研究が発展しても、現象学的・人間学的アプローチはその存在意義を失うことはないということを示した。

さらに後半部では、精神医療における患者－医師関係という倫理学的問題を、「インフォームド・コンセント」の実践という観点から論じた。精神医療においては、通常対立したものとして考えられている「患者の自己決定権」と「医師のパターナリズム」とが、相反するものではなくむしろ相互に補い合うべきであることが分かる。つまり、精神医療においては、精神病によって冒されている患者のオートノミーを尊重するためにこそ、医師のパターナリスティックな態度が必要とされている。精神医療において実現されるべき、このような「自己決定権」と「パターナリズム」の相補性は、他の医療分野における患者－医師関係のあり方について反省するときのモデルとなるのではないか、というのが私の考えである。その際、やはり病める

主体の全体的理解ということが必要となるのであり、ここでも現象学的・人間学的な人間理解が見直されてしかるべきなのである。

#### (5) 今後の課題

さて、以上見てきたように、現象学的人間学は同時代の生物学思想のもつ自然主義的偏向に対して、科学論的観点から批判をおこなってきた。ところで、今日の最先端の生物学的研究においては、還元主義的発想や単線的因果の観念を捨て、ふたたびある種の全体論的、目的論的発想を取り入れるような動向がみられる（システム論、オートポイエーシス理論、生態学的心理学など）。進化や適応という観点から人間行動を理解していこうという今日の生物学的研究の一般的動向のなかにあって、1920-40年代に準備された人間学的研究の成果は、今日ますますそのアクチュアリティを増しているように思われる。このような人間学的研究と今日の最先端の科学思想とのあいだには、多くの直接的・間接的な影響関係があることが明らかにされつつあるが、本論文では部分的にしか論ずることができなかった。今後の課題となろう。

## 論文審査結果の要旨

本論文は現象学的人間学の構想をメルロ＝ポンティの現象学と精神分析学との関わりを軸に再構成し、さらにピンスヴァンガーの「現存在分析」やシェーラーとゴルトシュタインによる「欲動」概念の批判を子細に検討することを通じて、現象学的人間学の科学論的意義を解明するとともに、精神医学における生命倫理的問題を考察したものである。全体は「はじめに」、第一部「メルロ＝ポンティと精神分析学」全三章、第二部「現象学的人間学の科学論的意義」全四章および「おわりに」から成る。

論者は「はじめに」において、まず現象学的精神病理学と生物学的精神医学との対立に目を向け、後者の自然科学的アプローチが支配的な現代においてこそ、還元主義的発想の乗り越えを目指す前者の人間学的アプローチの意義が見直されるべきことを強調する。続いて本論文全体の構成と内容が、自らの問題意識を明らかにしつつ簡潔に要約される。

第一部「メルロ＝ポンティと精神分析学」においては、前期から後期へのメルロ＝ポンティの思想的発展の経緯が詳しく辿られ、彼がフッサールの現象学的方法を受け継ぎながら、その限界を自覚し、独自の存在論的思索を展開して行った背景には、精神分析学との真摯な対話があったことが明らかにされる。第一章「メルロ＝ポンティにおける志向的分析の問題」では、フッサールの志向的分析の方法が「原様態－変様態」の区別に基礎を置き、しかも「原様態の優位性」が前提されていることが浮き彫りにされ、そのことが想起体験の分析において「過去の超越性」を論証できないというアポリアを招来していることが指摘される。論者によれば、メルロ＝ポンティは精神分析学における「事後性」概念や無意識の「無時間性」を参照することを通じて、時間的遡行という単純なモデルを捨て、「垂直的」存在論の構築へと歩みを進めたのである。

続く第二章「現象学的潜在意識と精神分析学的無意識」で、論者はフッサールとフロイトが共に自らの学問的方法を「考古学」と呼んでいたことに着目し、現象学と精神分析学の類似性と差異性とを解明する。一方で精神分析学の「無意識」と現象学の「潜在的（地平的）意識」



との間には、事象へ向かう共通の方法的態度が見られるが、他方で精神分析学の「抑圧」の仮説は、現象学的分析の中に解消することはできない。しかし、そのことは現象学と精神分析学が事象を探究する際に相補的に協働する可能性を妨げるものではない。その可能性をメルロ＝ポンティの身体論と間主観性論において検討したのが第三章「メルロ＝ポンティ身体論と精神分析学」である。そこでは、メルロ＝ポンティがワロンの発達心理学、ラカンの精神分析学、シルダーの精神医学などの成果を踏まえながら、「知性－感情」の対立の底にある情動的関係の層を掘り起こし、独自の「間身体性論」を形成していったプロセスが詳細に辿られる。さらに論者は、ダマシオの神経生理学的研究を援用することにより、メルロ＝ポンティの情動論が実証科学的にも正当化しうるものであることを明らかにする。

以上の第一部の考察は、論者の長年にわたるメルロ＝ポンティ研究を基礎に、隣接領域の文献を克明に精査することを通じて、これまで着目されてこなかった現象学と精神分析学との影響関係を多面的に解明したものであり、現象学運動の歴史叙述に新たな一頁を加えるものとして高く評価できる。

第二部「現象学的人間学の科学論的意義」では、ビンスヴァンガー、シェーラー、ゴルトシュタインらの議論に即しながら、精神病理学における現象学的・人間学的アプローチの特質が具体的な症例分析を基に浮き彫りにされ、その科学論的意義が科学哲学および生命倫理の観点から再評価される。第一章「ビンスヴァンガー再考－精神病理学的現象学について」では、ビンスヴァンガーの「現存在分析」の方法論が「世界内存在」を基盤とするハイデガー哲学との連関において叙述され、そこで提起された「自然史」と「内的生活史」との区別が、現代の「心的外傷（トラウマ）」をめぐる心理学的研究に認識論的基盤を与えるものであることが指摘される。続く第二章「メルロ＝ポンティにおける実存的分析」においては、幻覚、幻影肢現象、シュナイダー症例などに関するメルロ＝ポンティの「実存的分析」の内実が具体的に解明され、それがビンスヴァンガーの「現存在分析」の発展形態であるとともに、「統合」概念の導入によって心身二元論を乗り越え、人間行動を階層的に「構造化」したところにメルロ＝ポンティの独創性があったことが明らかにされる。

第三章「現象学派によるフロイト批判をめぐって」においては、シェーラーとゴルトシュタインによるフロイトの「欲動」概念に対する批判が取り上げられ、フロイトのメタ・サイコロジーが当時の機械論的・要素主義的発想に依拠しており、そのため彼の欲動理論が「エントロピー・モデル」と呼ぶべき一面的な自然観・生命観に裏打ちされていることが批判的に考察される。それに対して論者は、現代生物学の成果を取り入れたエムディの研究を参照しつつ、現象学的人間学による精神分析学批判の先見性を科学論的観点から再評価する。

第四章「精神医学と医療哲学・医療倫理学」では一転して生命倫理的観点が導入され、現代の精神医学を支配する生物学的アプローチの問題点が「病因」と「診断」という主題に即して解明された後に、さらに精神医療の現場では「自己決定権」と「パターンリズム」が必ずしも対立せず、相補的であることが主張される。最後の「おわりに」で論者は、現象学と経験科学の接点を求める人間学的アプローチのもつ今日的意義を確認し、オートポイエーシス論など先端の科学理論との対質を今後の課題として論を閉じる。

以上の第二部の議論は、現象学的人間学の構想と方法をビンスヴァンガーとメルロ＝ポンティの所論に即して明らかにし、併せてシェーラーとゴルトシュタインによるフロイトの欲動理論批判を通じて現象学的人間学の根底にある人間観を照らし出したものであり、現代におい

て支配的な生物学的還元主義に基づく科学主義的人間観に対するオルターナティブを提起したことの意義は大きい。ただ、全体の構成からすると各章の有機的連関に今少しの配慮が必要であり、特に異質の主題を扱っている第四章は「付論」として別個の位置づけを与えるべきであったと思われる。

総じて本論文は、丹念な文献的裏付けに基づいて現象学的人間学の全体像を描き出し、その科学論上の意義を解明するとともに、現象学と経験科学との対話を積極的に推し進めることによって、現象学が本来持っていた学際的性格を際立たせ、その潜在的可能性を引き出すことに成功している。これが「事象そのものへ」を標榜する現象学研究の幅を広げ、その学問的發展に寄与するものであることは疑いをいれない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。